
ビスクドールの昔語らい

小春月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビスクドールの昔語らい

【Nコード】

N2950G

【作者名】

小春月

【あらすじ】

小さな工房でつくられたわたくしは、貴方様の許に参りました。貴方様の側で、この世の至福を感じておりました。しかし、貴方様は遠い遠い争いの地へと、行かれてしまったのです。

貴方様。 貴方様。

どうかもう一度、わたくしを抱き上げてくださいませ。
その桜色の手で、わたくしに触れてくださいませ。

わたくしは、小さな工房で作られたビスクドールにございます。
都の花風も届かぬ田舎の小さな工房でございました。

つややかと揺われる磁器の類に、黄金の髪。桜色の口唇には、朱い紅が引かれております。皆、わたくしを作った青年の技でございました。

最初にわたくしが行ったのは、とある老婦人の許でございます。
貴族のような気品を持っていらして、わたくしはきちんと手入れをされて、出窓に座って外を眺めておりました。

毎日、毎日でございます。あまりにも長い間、わたくしはそこに座っていたのでございます。ご婦人が安楽椅子で編み物をするとき、わたくしはご婦人の指を見つめていました。

人の指は、なんて繊細に動くのでしょうか。なんて、うつくしいものを作り出すのでしょうか！ わたくしは、初めて人の所作を美しいと思ったのでございます。

ご婦人の編んだケープを着て、わたくしは窓枠に座っております。

安穩とした平和。わたくしは久遠の平和のなかに浸っていたのでございます。

貴方様、貴方様。わたくしが貴方様にお会いしたのは、そのときにございます。

覚えてお出ででございますでしょうか。

貴方様は都の花風をまとい、颯爽とわたくしの前にいらっしやい

ました。

出窓のうち。ほんの少しの硝子を、あれほどまでに厭うたことはありません。貴方様の笑顔に、直接ふれたいと思ったのでございます。

しかし。しかしでございます。

わたくしはビスクドールなのでございます。

見て楽しむだけの置き人形なのでございます。どうしても言えませんでした。

硝子を通して、花のような貴方様を見つめるだけにございました。

貴方様はなんども、なんどもご婦人の館にいらっしゃいました。なんども、なんども、わたくしの前にいらっしゃいました。

そのたびに、わたくしは手を伸ばしたくなるのでございます。しかし、いつも見ているだけなのです。

数年をそのように過ごしていくと、もはやそれが当たり前になって参ります。貴方様を見つめるだけで幸せなのです。

とある日。わたくしの主であるご婦人が仰りました。

あなたは、彼が大好きなのね。

わたくしはなにも言えませんでした。わたくしはビスクドールなのでございます。思っていることを、音にする術を神は与えてはくれませんでした。

しかし、ご婦人はおっしゃったのです。

あなたは、彼のところに行くのが、一番の幸せなのね。

そういうと、ご婦人はすこし寂しそうにわたくしを抱き上げました。

わたくしは驚いてしまったのです。作られてこの方、人の手に抱き上げられるなど、なかつたのでございます。

しかし、一度抱き上げられてしまうと、もう、それ以外のことは考えられませんでした。

わたくしは人形なのでございます。

ご婦人の暖かな日差しのような抱擁を受けたあと、わたくしは貴方様のもとに参りました。もちろん、ご婦人の編んでくださったケープを着て。

貴方様は、都のちいさな細工工房の職人でございました。

ご婦人の馬車に乗って、わたくしは貴方様の工房にやって参りました。ああ、今でも忘れえません。貴方様の嬉しそうな顔を。わたくしの入った籠をあげられた、貴方様のお顔を。

わたくしは、貴方様の工房の窓に座りました。朝、貴方様の挨拶によって目覚め。夜、貴方様の挨拶によって睡り。天上に太陽が高いつき、わたくしは貴方様の所作を見つめておりました。

細やかな指遣いで、貴方様はこの世に美、というものを生み出してゆかれるのです。ときおり、まぶしそうにわたくしをこらんになりました。

わたくしは、貴方様のお仕事を邪魔してしまったのでしょうか。不安なわたくしを心配するように、貴方様はきらきらする手を差し出してくださいました。ビスクドールであるわたくしを、なんども、なんども抱き上げてくださいました。

なんと平穏な日々でございましょう。

わたくしは、まやかな微睡みのうちにおりました。

その平穏が、跡形もなくなぎ倒されるなど、考えたこともありませんでした。

貴方様のお顔に苦悶の色が浮かぶようになったのは、いつの年か
らだったでしょうか。工房で細工をしていても、貴方様はどこか苦
しそうなようすでした。

貴方様の色が、日に日に薄れていくのを、わたくしは感じており
ました。しかし、どうしようもございませんでした。

時折、痛みを含んだ瞳がわたくしを抱き上げることで、微かな喜
びに染まったとき。わたくしはどれほどの至福を感じたでしょうか。
貴方様をお慰めすることが、出来るのでございます。

しかし、貴方様はある日突然、わたくしの前から消えてしまわれ
たのです。

貴方様の挨拶がなければ、わたくしは起きることも眠ることも出
来ません。

風の噂で、貴方様が遠い遠い地に、馬で行かれてしまったと知り
ました。他の国との争いの地に、貴方様は行かれてしまったのです。
なぜでしょう。なぜなのでしょう。

あんなにも美しいものをお作りになる貴方様が。

あんなにも心優しい貴方様が。

なぜ、そのような醜く愚かなところへ行くのでございます。

もう一度、わたくしを抱き上げてくださいませ！

もう一度、わたくしを抱擁してくださいませ！

なぜ、お帰りにならぬのです。なぜ、お戻りにならぬのです。な
ぜ、おはよう、と声をかけてくださらぬのです。

暗闇に染まったわたくしを引き取ってくださったのは、あの老婦
人でございます。

老婦人の館で、わたくしは待つております。

貴方様、貴方様。

醜く染まってしまったと、お嘆きにならないでください。愚かなことをしてしまったと、お嘆きにならないでください。

優しい笑みを浮かべ、もう一度、わたくしを抱き上げてくださいませ。

暖かな心を持って、もう一度、わたくしを抱擁してくださいませ。

貴方様が戻っていらしたら、わたくし。言いたいことがあるのでございますよ。

どうしても、言えなかったことにございます。

わたくしと一緒に遊びましょう。

わたくしはビスクドールにございます。貴方様の人形なのでございます。

(後書き)

戦争に行ってしまった人が残した人形視点。なんです、上手く書けない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950g/>

ビスクドールの昔語らい

2010年10月17日09時09分発行